

京都 鴨川探訪 ～絵図でよみとく文化と景観～

編著者 鈴木康久 出版社 人文書院

鴨川をテーマにした書籍は、『鴨川風雅集（京都書院）』や『京の鴨川と橋（思文閣出版）』、『鴨川周辺の史跡を歩く（京都新聞社）』など幾つか出版されています。しかし、文化と景観を中心に論じた書籍はありません。そこで、本著では文久元年（1861年）に発刊された名所案内記『淀川兩岸一覽』の絵図と、戦前の絵葉書、現在の写真を比較するなかで、鴨川や高瀬川等「水の道」の魅力を読み説いてみました。



例えば、太閤秀吉が造った三条大橋の絵図には、橋上には馬にまたがる旅人と、川の中を進む3台の牛車が描かれています。これは公儀橋であったために牛車の通行が禁じられていたことを示しています。細部を見ていくと、橋脚に打点があることから石造りであることが読み取れます。この橋脚には「天正十七年（1589年）」の年号が刻まれており、現在も40本の橋脚の内、7本には建設当時のまま石柱が使われています。400年以上に渡り、多くの通行人を支えてきた橋脚ひとつを取っても興味の尽きることはありません。

このような事柄を紹介している本著は3章で構成しており、第1章では都人の暮らしを支えてきた鴨川の流路から文化特性までを概括的に紹介。第2章では江戸後期に描かれた絵図から当時の旅人の様子や祭事などを読み説き。第3章では水辺の景観の変化について、先人の日記や和歌なども引用し説明しています。

第1章 鴨川 千年の流れ

～鴨川と京都人のかかわり～

第2章 絵図からみた鴨川と京への道

『淀川兩岸一覽』と鴨川

1. 三条～稲荷（三条大橋、五条大橋、高瀬川など）
2. 稲荷～伏見（竹田分道、柳茶屋、藤森社など）
3. 伏見～淀（伏見京橋、伏見船宿、淀城など）

※コラム 陸戸川の「道」、三十石船

第3章 移りゆく鴨川の流れとその眺め

洛中のにぎわいを演出する「鴨川」

都の動脈「高瀬川」

舟運の要所「淀」

本著を執筆する中で見えてきたのは、150年前の絵図は当時の最先端の技術や情報を指し示している事です。長大橋や舟運、水車に寺院の素晴らしさについて、絵図から旅人が飛び出してきて話し始めてくれるように思えてきます。この事は、今を伝える写真にも言えることかもしれません。日々の暮らしに根ざした歴史を伝えてくれる文化的景観、そして時代に応じて変化する景観をどのように評価するのかを考えなければいけないようにも思います。江戸後期からの150年の変遷を伝える多くの資料（絵図、戦前の絵葉書、写真）を掲載した本著を片手に、鴨川から淀までの物語を探しに出かけていただければ幸いです。



編著 西野由紀 鈴木康久

出版 人文書院

定価 2400円＋税

問合せ 075-603-1344（人文書院）